

ぼくの居場所

甲府市立北中学校一年 越賀 一真

ぼくは小学校の四年生の運動会の練習の時に、皆と一緒に行動する集団行動が嫌になった。なんでかわからないが、とにかく皆と同じことをするのが嫌で運動会の練習に参加できなくなった。それからぼくは、教室に行かずに保健室登校をした。保健室では自分のペースで過ごすことができたから気持ち的にも少し楽になった。でも親や担任の先生に教室に行くように言われて行ってみたが、友達と遊ぶのは平気だったけど授業になるとソワソワしてしまいすぐに保健室に戻っていた。

五年生になるとなぜか分からないが、自然と教室に行くことができた。でも、授業中に何をしたらいいか分からなかったから廊下に出たり、教室にいても図書の本を読んで過ごしていた。休み時間は友達と遊ぶのが楽しかった。

ぼくは学校ではどこにいたらいいか分からなかった。だから家にいる時の方が気持ちが楽だったから、学校を休みたいと思うことが多かった。朝起きて学校の準備をするのが嫌で、布団から出ることが出来なかったからお母さんに何度も怒られたこともあった。お父さんとお母さんがぼくが学校に行けるように、好きなゲームを朝の五時半からできるようにしてくれたりもした。それでもどうしても行けない時は休むこともあった。

学校に行けても、授業中は廊下にいることが多かった。そんな時に、他の学校の通級の先生が見学に来ていて声をかけてくれて通級に通うことになった。

はじめは通級がどんなところかわからなくて、緊張と不安でいっぱいだった。でも何回か通うと通級の先生と話しをするのが楽しいのと、学校から早く帰れることで気持ちが楽になった。通級はコロナが流行し始めたため、中途半端で終わってしまったのでとても残念だった。

六年生になる前に、先生と親から支援級の話聞いた。支援級は五年生の時に何度か掃除をしたり、支援級の先生と話をしたことがあったからどんなところかは分かっていた。だから支援級に入った方がぼくの居場所があるのではと思った。

六年生になってすぐはコロナの緊急事態宣言で学校が休校になっていた。学校が始まってからは支援級の教室に本当に行っているのかわからなくて廊下で

ウロウロしていた。支援級の先生が「教室に来ていいんだよ」と言ってくれたら、安心して教室に入ることができた。支援級で過ごす時間は今まで通常級で過ごしていた時よりも、人数が少ないからすごく気持ちが楽だった。ぼくの学校での居場所が見つかった気がした。

今までは学校に行くことがつらい時もあったけど、支援級の先生が「休み休みでいいからね」と言ってくれて安心した。

中学校に入学する前はどんなところか分からなくて不安だったけど、見学をしたら中学校でも支援級で過ごす方がぼくの居場所があると思った。

実際に入学して分からないこともあるけど、教科ごとで先生が変わることはぼくにとったらとても新鮮だった。ぼくと先生の二人きりで受ける授業は緊張するけど、小学校の時のようなソワソワした気持ちはなく教室で過ごすことができる。

ぼくは支援級に入ってから学校での居場所を見つけることができたと思っている。それはみんながぼくのことを理解してくれて、ぼくが過ごしやすい環境を作ってくれたからだ。

人権とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持っている権利」であって、だれにとっても大切なもの、日常の思いやりの心によって守らなければならないものと言われている。だからぼくみたいに集団行動が苦手だったり、まわりの人と合わせるのが苦手でも自分が幸福に過ごせる環境があることが大事だと考える。

今後はぼくだけでなく、みんなが幸福に過ごせる環境づくりができればいいと思う。